



近世名家書畫錄

義亨題簽

冊下





近世名家書畫談下巻目次

- 諸名家遊歴の事
- 雪山の軼事
- 貝原益軒の軼事
- 柳澤淇園の軼事
- 趙陶齋の軼事
- 大雅堂歿後遺墨紙賣る事
- 曾我蕭白の軼事
- 謝蕪村の軼事
- 松林山人の軼事



名  
山  
の  
書  
畫  
談  
下  
巻  
目  
次

- 平春海の軼事
- 橘千蔭の軼事
- 應舉の軼事
- 建巢兆の軼事
- 筆匠篆癖の軼事
- 諸先生真跡落款式附

近世名家書畫談下卷

雲烟子 安西於菟編次

諸名家遊歴の事

近世遊歴と叫び都下の書畫家文人詞客やもは  
 筆硯を帯び他郷に遊びて技以賣ることあり尤も壯  
 遊する者今亦一等の佳き者老儒先生信越の行  
 里盛なるハありとさう先生學術文章者今の巨擘  
 しく近くも清の錢收齊王漢洋のめき鴻儒も先生の  
 為る多三舎紙退くべしと承る又吾人となり磊々落々平  
 生一世を不可と譬ハ貴人權勢も眼中に在るやとの

名家書畫談 下卷

容氣ありて北遊の始ふ當り其地の諸子弟先生以待  
と大旱の雲霓を望みぬ於是先生到る家處經を解  
けり古人未發の妙説あり詩文以作れが皆不朽の文  
字なり其餘狂草裁墨これを求むるの至一紙半緘も  
見ると懐素張旭の真筆以はるごとく因是潤筆積  
て數百金と成ふと聞及りこれより其地の子弟お先生  
の教化よまを詩書以事と居然たる書生と變て交  
思たるもの愈先生の徳を仰ぐと傳聞くさく先生得る  
その潤筆はもたげて散り去り家以帰るの日其手は  
半文緘ものごとげもせん果てて志するやその説の如く

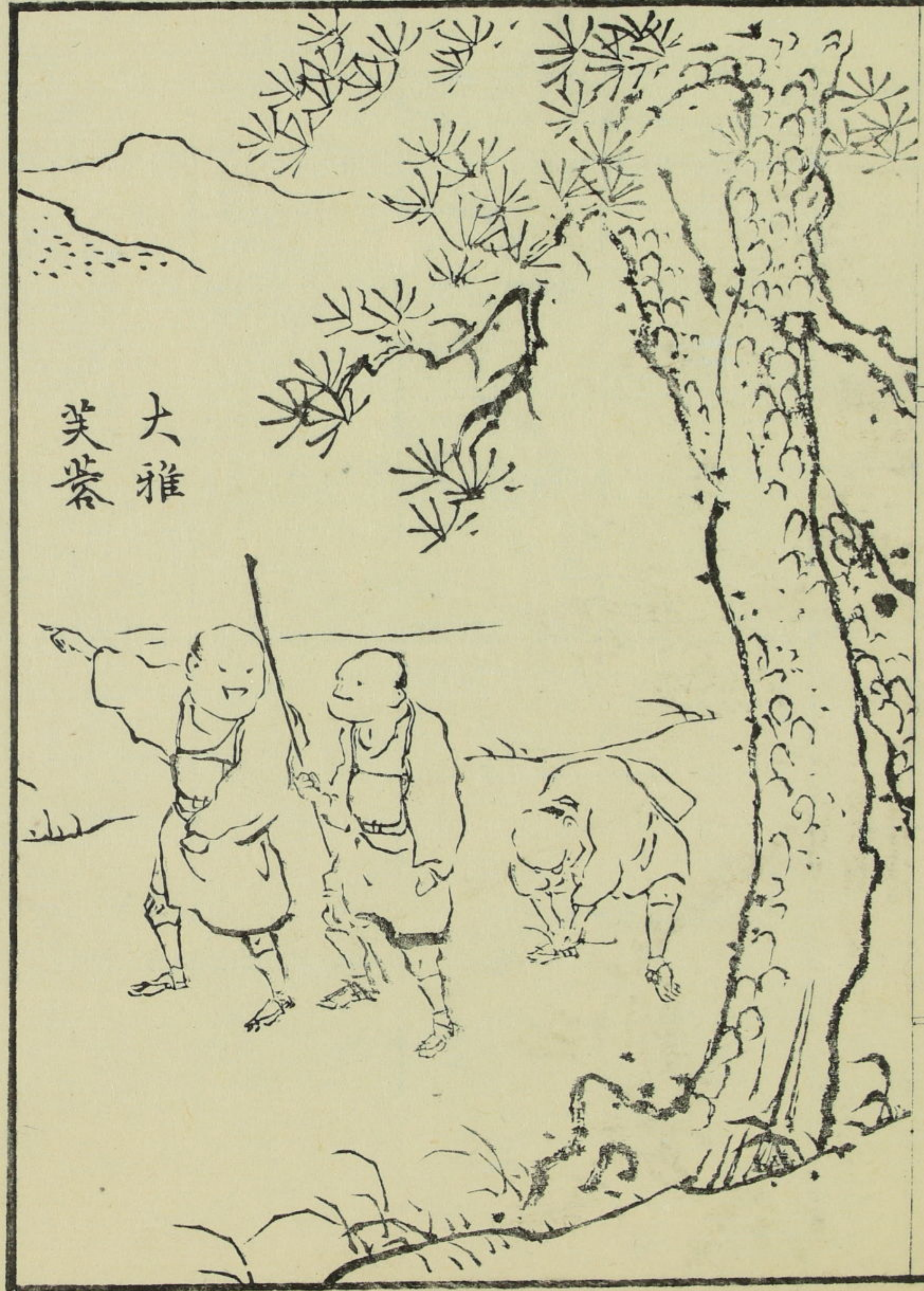
まらば先生乃壯遊を唐山の人も及ぶるべ試と擧て或人  
と問ふ或人答て云康熙年間李笠翁ハ天下以周流を  
と數十年詩を賣り文を鬻り其名當時は高くこれを  
明の李卓吾陳仲醇の才も不及と云至る笠翁嘗て貧  
なること以友告らば其友云子有筆勝鏃基硯同  
負郭賣文已足糊口所至輒有逢迎何貧之有と一家  
言も身はつりされども笠翁を潤筆以手は從て散  
去りしとは身は蓋し笠翁と彼先生とは學問文章  
相去ると圓月と團圓ほよめたがひ有らん其潤筆を  
手は増ておぼるるに至りては先生の高きと百尺竿頭

あるべしとて其人を感服し時り其人敗壞せる  
一小時傳紙出に於菟よあして云これハ昔時池大雅高  
芙蓉韓大年の三老人回遊して三岳に登り一時大年腰  
間小帯たる小遣帳より余をて身する表に三岳記行  
と類し背小韓の一字紙類ハ肉に起程の日よをて目  
雜費並に途中の光景記し又身する所の山川の真景州  
走筆を向りあり今中をてこれを身れハ一見の間  
三老遊境想像するまた了り因て大畧を左に載  
七月二日 抄百文六日市藤左衛門頼泊尤并當持此方  
礼次等一百廿六文内の男長九郎門三人荷物案内牛首

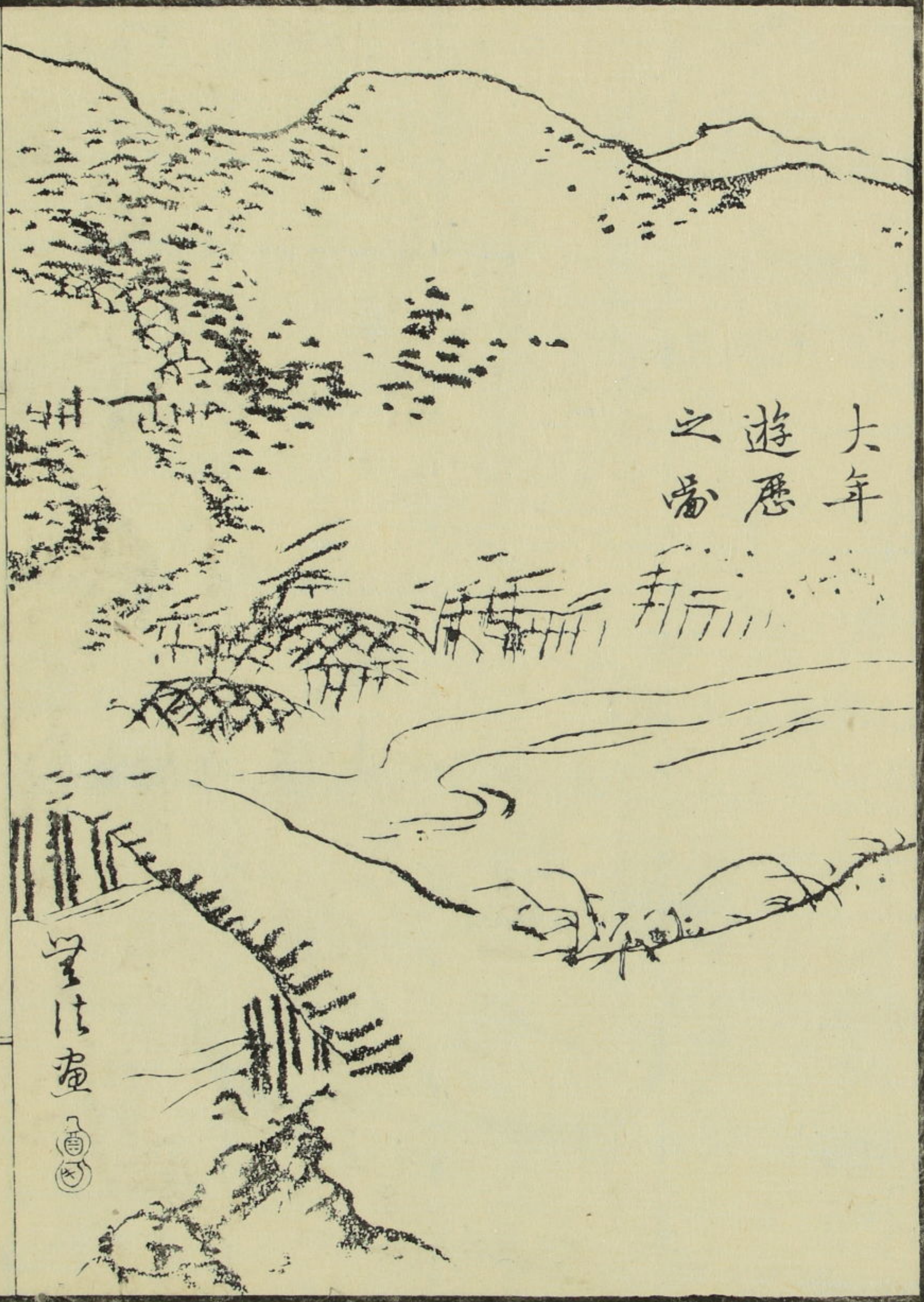
追記之みり下の白衣道者なぬはより同日一百文牛首  
七郎を中食をせし話料三拾文米を并代  
一百文韓よりかぶ代一廿四文池おどり見物入用一拾文  
あ免代かあるせし類なり或人云この小帳紙又れは生  
往來木らん泊るくも六部僧の境界も又火食せ  
ざるのめぬはの文人墨客生る名紙鳴り口り膏  
梁紙嗜み足紙肩輿に託して生技を賣り遊歴する輩よ  
りこれを見まはしるも殺風景なることあらばやれども  
この三老人好むおたぐ千山萬壑烟霞泉石の間ありそ  
其外ハ形ハさるべしと云られたり余この小簿一二頁並







大雅  
芙蓉



大年  
遊歷  
之  
處

望江畫





あゝながくも

長よるや

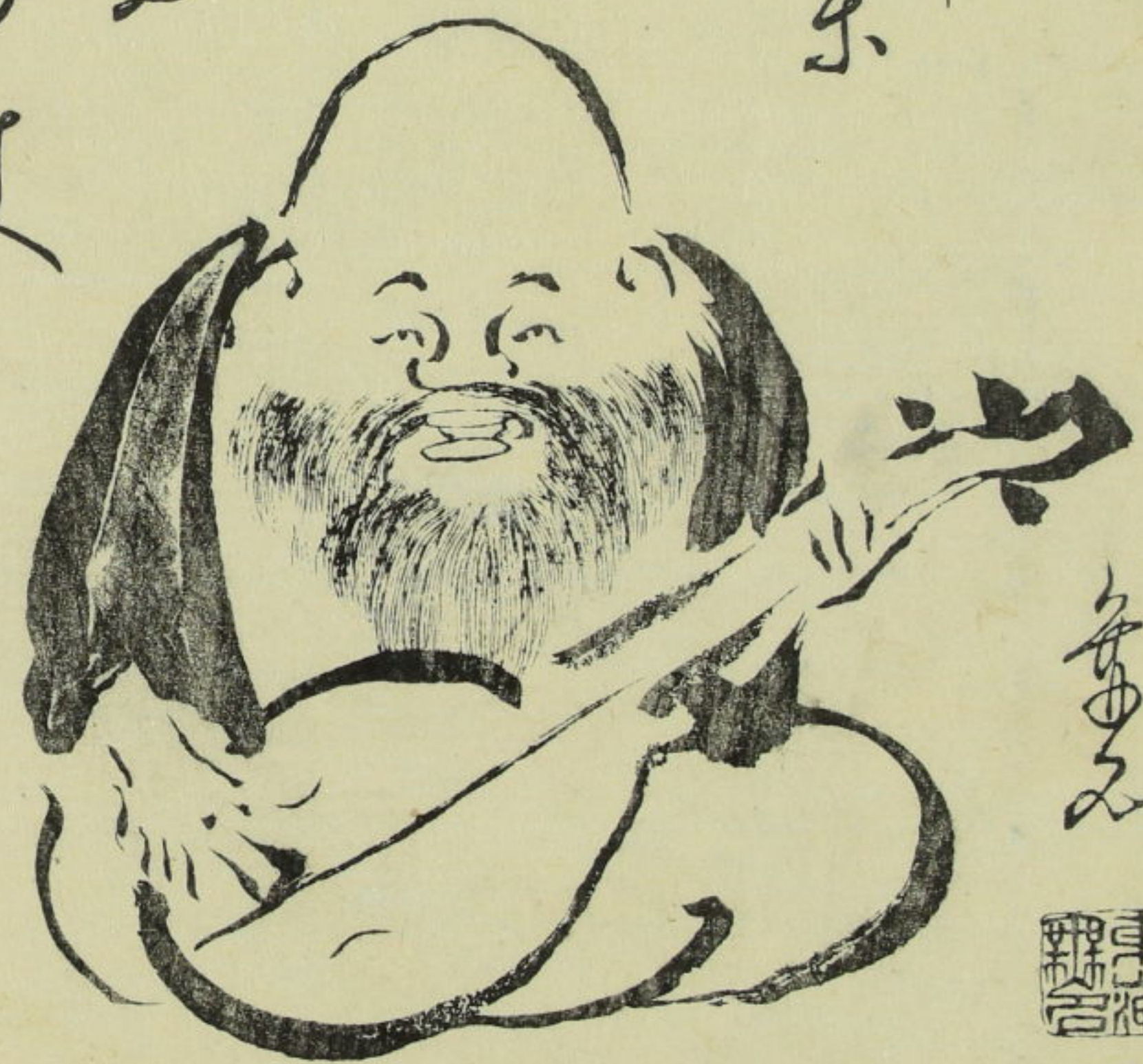
まの板

の

いよそ

ちよふ

いよそ



雪山の轍事



雪法畫史稿序

雪山の轍事

雪山先生ハ肥後熊本の人なり代々北島三立をりて稱ハ元  
 加藤家の侍醫なりて加藤家瀬國の及細川侯ニ仕ヒ  
 食祿五百石次賜家先生の父三立學問紙好國侯不  
 彩ヒ雪山を具一長崎ニ遊ぶ所比身唐賈の外學才  
 秀才也長崎不來り游ぶ者多く又居所も縁ニ隨ヒ自  
 由なり一時あれど三立の僦居ニ學生の數ハ寄宿せり  
 三立も資力ある人なれども身を賃房錢ニ會らば  
 却て管待して學問の相手に志する者唐人も名ある人  
 のとなりこのある先生も幼より學問を習ふ直る唐人

後漢所謂書学の撥證法往々紀載ハ見ゆれども文  
章の上むりにては會得し多ざる紙先生ハ比舶来の  
人俞立德ヨロ授面命してこれ紙受たりこ事よ里又廣澤  
先生傳授せしと云

雪山先生書法傳來左ニ載ル

明文衡山先生正傳筆法統脈

衡山先生 名璧字徵明以字行 文 彭 字壽承 衡山  
嘉 衡山次子字休承 文 啟美 嘉之子  
全 梁 字棟材号松舍應 任 德元 字吉卿号花  
俞立德 字君成号南湖杭州人傳 德元 源傳梁筆法  
寬文初年長崎客雪山父家凡三年

北島三立 号雪山初号花隱又号蘭隱後号雪  
遊長崎父以居傳為業故唐山人每歲來其  
家先生穎悟過人故來容皆奇之立德特愛  
之授以文衡山嫡嫡相受之筆法立又贈曼  
君子存之圖章立德不來之前從戴曼公學  
後得衡山遺法而棄舊學

細井知慎 字公謹号廣澤晚年又有玉川奇勝  
先生以君子存  
堂蕉林菴今日庵思貽齋諸号雪山

黄蘗隱元禪師其徒數十人と長崎ニ至る隱元の弟子即非  
ハ尤善書の名あり雪山先生書のこと紙即非ハ問なると  
なり獨立を戴曼 隱元の書記なる元來俗なりハ俄ハ  
雜髪して 我邦ニ事家也(法義の事を踏といへり

書も撥籠法紙用ひば雪山先生初め書法を問ひて  
 撥籠法紙得て後を只方外の友と書法を問ひて  
 とある時獨立云書紙の秘書ても筆力精神雪山  
 及び是をいふといふ我も獨立なり雪山も三立なり  
 二立是らばと滑稽しと形り雪山先生江戸より  
 一は芙蓉の僧は同伴して江戸青山法龍寺に来る道  
 来より青山賈人の家より雪山の手より大福帳の上書あり  
 一となり雪山先生海龍寺紙出て江戸室町浮世草紙  
 寓居し時門人五六輩あり土州藩の都筑道乙山田系  
 町有屋某生一人の廣澤先生なり

此時先生号菊出嚴裕  
 林辻辨菴は母方の姓な

り醫業次初む中年よりお姓より  
 細井次郎大夫と云ふ人 或時雪山先生廣澤先生と謂て云  
 足下の書、當時未だ五六輩の中こそ才一の不器用なり文  
 字の形醜いされども久々々々善書の名をばばはん志す  
 ば書名の高きあり君子の大業紙失ふべし必し強て  
 書紙好むとあるんといふ事となり實に先生の才領  
 書不掩れお家とのいほせを心ゆる人もあり雪山先  
 生の言果して然り

雪山先生江戸よりある時某閣老或人の説は  
 柳澤侯也 非常の人を愛し先  
 生は月持三十口を贈らる又衣服酒食亦紙贈らるる先  
 生潔癖ありて生衣服を水紙にて洗ひこれを忘る人な

寓居半浴室のごとく板紙を敷き張るに湯桶の  
 ごとく一日先生出てゆらば数日を経て其の處を知らば  
 閑老きいぬひ之東崎人なるは其の捨おつき先生の  
 家什も奴僕も与へらるるまは先生家へ帰るに體汚  
 人のぬく身は破薦紙まとい竹杖紙つきかけ椀を拵浮世  
 少詠に至り曰我居のうなりしや家主曰先生は其處を去ら  
 ば止と紙は君上の有司お告げ斯はなせりと云先生曰  
 我ううろ人なを羨しく思ひたるぬ家紙を去る人となり  
 橋の下はゆくと数日其飢寒なれば故郷へ帰るより  
 ぞとて飄然として去るそれより青山法龍寺に至り沐浴

し服紙改め半年程止宿して西へゆき此時書紙求むる者  
 多し青山久保町より大福帳の三字を書し此時なり  
 先生元権勢富貴の人紙嫌ひ性酒紙嗜しみ賤者といふも  
 酒紙をぬめ字を求むる揮毫しとぬ故に賤者多く先生  
 の書紙傳へしより三井孫兵衛親和賤者の傳へたる三體詩  
 絶句全く書る家真跡を得たり  
 雪山先生東叡山櫻盛に閑くと閑記廣澤先生を謂て  
 曰晴日より人多くして喧し雨中の花紙をぬぬと約し於  
 節雨降りければ雪山廣澤兩先生門人五六人を同伴し  
 酒肴紙携り東山に至りし雨のふく降る時なり雪山

先生ぬれぬぐう大杯を傾け榎樹より志をとり落し  
雨の清げれをこねる浴せざんばあるづらばとて頓て頭紙  
さへ全身を水におせまらるゝ大碑して泥土を轉び  
て物られりりと廣澤先生の話ありとぬん雪山先生江戸  
もあり一時を際病甚しきりりと長崎に帰りて浮十六  
年もありせむつめとらび赤貧うとて倍石の儲けなれど  
とも崎人尊敬して名紙めとて噂のなき先生とのこ  
えうりとぬん酒あき時の字紙寄し海店とて文字  
の敷よりと海看紙送り平生碌紙おせりとぬん  
雪山先生の書ハ舶来の人殊に賞せりとぬん價貴くぬん

物りりとぬん又先生の書紙ぬんとて黠る者も先生  
の他適紙窺ひて先き路傍の家は筆硯紙儲け教人集  
りて各字を言ひ先生これ紙身と云書ハかゝる書く  
りのとて筆とり数幅を作るは海看をすめ次才  
紙を出る先生ぬんとて紙忘れた影とて揮  
毫せりとぬん  
長崎より富貴あるりの多し常は奢侈を極む或時一  
人の富家遊紙開き同僚紙招とありはの家方より謂  
て曰若雪山先生紙迎ひ席上にて字を作らぬはこれ  
外の馳走なりと云是ハ先生元來驕奢の家に至らぬ

沢知りての難題なり時、亭主松智を呼んで、先生  
 常は愛する所の賤者、謀りていせざる、今日ある所は  
 美酒佳肴ありて、終日の無双催ひ先生を、んやといふ  
 先生これ、涎を流し急なほひく、五れが、いある、さ  
 きの前より、席上、豪具をかぶり、水陸并至る先生、一息  
 て、忽ち奢靡を惡く、杯をとり、惠飲傍若無人なり、時  
 主人云、先生の揮毫を煩はし、娼婦お伴して、俱にこれを  
 乞ふ、先生云、まゝ、兩名、汝紙并て三名なり、三紙紙、さ  
 展よ、とて、大筆を、墨を、蘸し、一紙、とふ、陰器、一莖、を、書、出  
 し、三名、三紙、を、授与、し、手紙、揮て、帰る、は、及、途、中、ま

天濤先生と逢ひ、れが先生云、此程を、書、達、の、こゝ、に、見、る  
 と云、れ、が、雪山先生云、馬、廉、ども、一、莖、づ、か、つ、げ、な、り、と、云  
 り、れ、る、よ、し、天濤先生は、ほ、は、彦、彦、先生、の、語、を、ま、つ、り  
 と、なり

右雪山先生の教条を、雪山、彦、彦、先生、合、傳、といふ  
 書あり、そのまゝ、の、抄、出、せ、り

貝原益軒の軼事

貝原先生、篤、學、徳、行、の、君子、儒、なる、と、誰、り、知、ら、ざる、もの  
 あらん、又、尊、れ、を、も、好、ま、れ、る、と、世、に、傳、る、と、稀、ある、故、に  
 賞、さ、る、事、を、紙、見、る、と、星、鳳、の、如、し、先生、の、字、帖、に、東、崖

先生の歎くゆひて云益軒子之書端好有度老而不  
 衰云云これら尤高年の作なるべし於菟向は行書七律一首  
 小幅紙見しとあり字様を古法帖紙修熟せしものと身へ  
 たり行筆尤美事は之ゆ因は福岡藩邸山退齋先生乃  
 話なりと云或人の語るれし貝系先生遺事あり聞するは左  
 不録は先生京師へ上りし時道中湊川を過ぎ楠公の昔紙追  
 想し折しも田間は一孫丸のぬき小高き所ある紙紙身へ傍  
 り多老農はこれ紙問れり答て云こゝは往古より金口碑は佳  
 楠公討死しぬし時遺骸をこゝに瘞しおなりとて今  
 日刻りし此紙のぬきを畦畝の間への所へ除き耕しおふべし

語る先生この言紙きく不覺涙下り慨然とくおのひらく公  
 の忠臣あること古今は比なく芳名青史は垂れ千歳不朽な  
 りといふも其寔空の不吟かく荆棘は没し片石の表をるる  
 いろいろぬかぬかして来るの如くぬ牧豎田夫の為る此所  
 いづなるべきや吾輩讀書の者聊義理をも辨へ此事を向  
 くまゝといふべき責て公の梗槩紙片石に記し是を表  
 してあはば往来の人にも自然と遺跡の存するをも知り又牧豎  
 田夫の唐突をも免れんと思ひ生白は先生兵庫の高賈某  
 の家は宿紙扱ひ某は兵庫の富者なり福岡侯大坂廻米の國用を聞者なり此夜先生宿主人小  
 旅中の事ども物語り湊川まで所見所聞並は自らの趣を

月も及れば主人欣然とて云おも難有思言紙筆の裁  
 鄙人数代此所は住居一畢竟其古あるは鄙人おも楠公の  
 民なり物換り星移り公の瘞り一所さかくなりたふら  
 唯つゝきことどもなり鄙人数代此所も先生沙國の由  
 用をも蒙り右をりて多口の家眷紙安穩といつて居しを  
 先生以て及の由趣言は付力紙出まらつていへ一況也公の瑩  
 域先生由筆もて顯しむと鄙人も又望所なり先生系師  
 おいさるるち碑文を作りぬし由速く必以賜られ碑式ハ  
 其上は指圖紙ゆき立石の速く成就やさんとて殊に  
 喜びたり無程先生系師も碑文紙作り約のぬく陸

途より主人へ賜られがやいさるる猶ほ帰國の碑式委  
 く由認賜れりといふ勿くは別れり其後先生の書來り  
 りれは主人にあり碑式は中にあるべしとて聞き見るふ左  
 へをあれで先生の言おせし碑文を返さるべしとて  
 ころり宿主人不審ながら或は改竄しむとありやあんと  
 形を返しやり再びこれを待つる又程もなく書來りて云我  
 等先生は湊川の身向する雲をりて一旦は思ひしまふ  
 勿卒にも其教は言漏はべりぬ退て考ふる楠公の精忠  
 千古も互り日月と光を争ふかふる希代の忠臣を碌にたれ  
 書生の拙文もこれに表せんとい誠は己の分紙知さる



いざなり今是誠心と恥ぢ不覚熱身汗を流さうかれば  
此事思ひ止め返くも是れ一藤忽の言を中なりと言おせ  
りとなん実と先生の徳行此一よりそら志るべし此後

義公立碑の由ありて碑面は嗚呼忠臣楠子之墓と云ハ  
字を隸書とて伊予づく遊ばし背は舜水先生の文を彫  
りぬし跌宕は三國の太守なればかく心を以用ひありしとなり  
昔時楠公ハ三國の太守なればかく心を以用ひありしとなり  
うり曾て又墓田をも以附しありしと承る實は希代乃  
美事と云べしこれより見れば貝原先生暗く待たぬあるは  
似たりともしいりん或人又云舜水先生碑文は動もそれ其體

を失へりと云者ありぬ文ハ舜水文集とありて楠公父子乃  
賛辭二篇あり是ハ其一なり義公は立石の以ハ舜水先生の  
既又歿後の子と見えたり其體は失へりといふハ管見と云

柳澤淇園の軼事

柳里恭ハ世に知られ人なり其身ハ大夫として能く職  
に専ら生涯一日も奉公は私日なき中ハ風流韻事洒々落々  
たる名家なり随筆云とて稱と云りのあり其中心ハ画法を  
論ぜらるる辨は人意の表と出で神も通べしと云べし此  
心より稱と云隨筆甚まなり勢州四日市の驛ハ西村

氏といふは秘藏せり文の發端ハあらの系表日の里より  
 料と云女郎ありと書出終るる生涯の字文を妓婦乃  
 帶一筋又代んと分て洒落なる文法あがう一部の文カ格  
 別乃論すて拔羣の隨筆ありと近きころ愚雜俎と云書  
 又見たり又郡山某の話を左に記以淇園先生一日書齋  
 て山水を作られしつら窓下又乞人あり手紙つき伏して  
 是紙伺ひ見る其容蓬頭跣足敝衣縷ことして未だ若  
 日一飯をほざるありとされども衰顔不允雙眸炯々  
 先生画局終り始て頭を擧げ乞人牕下画を見て公辨  
 する體狀見謂て云汝ハ我画を見て樂しきや乞人答云

先程より坊草紙見たり身ハ青松白石の間はありて烟  
 雲紙弄する如き心地のこころ様よいかども君の骨懐  
 ておははくれ侍るなりとそ程箕踞してたゞ時先生  
 様手をおお抱もく汝ハいなる人な我れ又汝ハ骨懐を  
 おしえりて生風流ハ吾輩又一籌とゆつるものも是  
 つり我画汝ハ賞玩の預りていふ年燕つてこれハ汝と云  
 べしとて手づから画紙巻て与らん乞人欣然とて云賤  
 人これを名山の間を展覧し程邱壑とこの奇を聞し  
 へしとて画を抱き手紙揮りてさる日あらはして乞人又  
 来りて調を請ふ先生固よりゆき思ひはれが急速り



蘇法戲云



逢ひて仔細をも向ひんと志する人云此程を貴筆紙  
 賜り展覧するごとく是の画中の松ハ仙風の響音を以て  
 かくとく清涼い掬く飲んと思ひあて一邱一壑乞人持る  
 ありてのまじりされば謝し奉るべきは辞なり乞人近以某  
 山某處は暫時居臥ト一ハ野乞人の賤しき紙忘れぬ  
 明日午後住家紙尋ありて聊寸志の謝をも報し奉りま  
 さんといふ又飄然とて去る先生いふは怪しき又生趣の  
 凡なるを思ひて生翌生處に到り身するは山紙登ること  
 十五六町より山上古松數百株の間ハ徑あり生徑下登の行  
 れもなく又往て半町をりより少くお開けたる處あり

て峭壁に垂枝の松あり此枝は一條の繩紙下げ新しき土瓶  
 の下は炭をいけ湯も能くたち又新しき手桶に清水を貯  
 へて酌を添へ傍に新しき薦を席をりあけ生上は皆  
 茶具紙ならぬのづれも麁物なれど清浄の品なり先生思ふ  
 こそこれ乞人我為に設けんとて生席を望み今乞人言  
 へるべしと待と多時されども終ふ来らばこそおめて先  
 生手つら茶紙立て教盤を傾けしは席上便面あり紙を  
 くちふとく開き見ると一首の絶句ありて云這廻空過二  
 十年肉重不能飛上天抖擻衲頭還自笑囊中也沒  
 一文錢と狂草の字生勢飛動せり於是先生不覺

驚嘆再三自ら失わぬ程乞人を待てども来らば  
遂に家を悔りしと云ふされどもあを人のいふる隠君子  
に必成る仙孤学ぶ者もやと云ふ先生時々これ  
いふ

趙陶齋の軼事

或人云昔時一士人其君の爲に謀るとりて大璫の門はより  
樞要の吏に邂逅はれども吏のいと饕餮の程なりて  
只多き孤貧に飽て孤知るに於是士人これ餌するに四時  
の珍味を贈りこれつゞるに白鍍紅緞茶器古董の類陸續と  
贈るこれよを志すに日厚く兄と呼び弟と呼び或は

相俱に酒樓伎館に自遊流連して士人も又これなる歡樂  
を考せりかの吏曰士人は云世に趙陶齋と呼ぶりの善士  
ありと聞く君かれを拉来して小酌を催して揮毫紙  
見て興紙助け且夕佐觴とせんといふ士人幸に陶齋紙知  
る紙り急ぐ是紙諾し即日陶齋を訪ひて云僕恩人  
あり久々先生の墨妙を賞し目前に揮毫紙形も  
黄縁なく今僕を介して請ひ来し僕が爲にかれが宅に  
玉趾紙回さばかれが喜ぶに僕が幸なり陶齋これを許諾  
して一夕主人と俱に往く刻を過ぎるに腕畢りて直に後聽  
に引く是夕主人聽心は紅毯を布き筆硯を設け惣て

文具排列いかり八窩壁やまの壽星龜鶴の三幅對をくけ前まへの巨大の銀瓶ぎんびんは数朵かずたの牡丹を挿さ庭際にわぎわをわ二區の茶室あり一樹一石も奇ありあ其姦くさ富ふ問いはくく既すでに耳房みみむらより西三の嬌婢けうべい一樣の艶妝えんそうを茶を挿さ出づ尋たづで名匠なせう佳肴けいやく次第しだいに至るいた淫奢りんしゃ又問いはくく時ときは主人先づ太白たいはくを傳つため稍や威福いふくをあり士人しじんは漏もれ士人再三杯さいはいを領りやう一飲いっぴんして覆ひひ生杯せいはいより復また陶齊たうせいは屢しばしば一語いっご頗すこる不遜ふそんを少すこし陶者たうしや忽たちち箕踞きそ盤礴ばんばく一鯨飲けいん數杯すはいを罵ののして吾われハ知名ちうめいの趙陶てうたう高たかなり今夕こんじつは獨窮どくきう泥ぬて脚あしを鵲群せうぐんに失あり汝輩にんばい俗士ぶくしといふ人ぞ

書奴しよぬとなりんや且また壁上かきの幅俗かふぞく悪あいといふ一いつと一いつと遠とほく茶ちや瓜うりと一いつ画中えちゆうを縦横じゆうけいを抹まく飄然ひょうぜんとて去さると云此話このことば何人なにびとなり哉や漢文かんぶんりて記しや瓜うり今拙譯けつやくしてて載のせ或人あるびと云唐山とうざんはて此話このことばの類るいと堅瓠けんこ集しゆありと一則いつそくを贈たまはる曰いて左ひだりに附つき工部こうぶ主事しゆじ某ある奉ほう差來さらい蘇燒磚そせうてん某ある内閣ないかく属ぞく求もと沈石田しんせきでん畫え主事しゆじ到いた蘇そ即出すなは票ひょう拘こ之の石田せきでん到いた署しよ主事しゆじ出で紅紙こうし一張いっしやう索さく画え石田せきでん盤膝ばんせき坐ま地ち磨濃墨まのうみ扯紙せし一いつ半はん團だん作つく一いつ毬きう於お硯上えんじやう蘸せん墨ぼく印いん下した墨團ぼくだん三四さんしゆ用もち筆ふで勾か作つく黑鷺くろぎ鷺ぎ題だい云青天くわんてん一箇いっかん木犀もくし窟くつ千山せんざん萬山まんざん無な鳥跡ちようせき鷺ぎ鷺ぎ飛と入い破窓やぶさう中ちゆう一いつ身み毛羽もうう變成へんじやう墨ぼく寫しやう畢ひ遂すい拂袖ふくしゆう而去を

大雅歿後遺墨以賣事

大雅謙法の山水を画すべしめたる扇面を圍して自ら携へ  
 近江美濃尾張へ售んとし人多く恠て買者なり於此空々京  
 帰らんとす津田の橋を渡る時其扇を出しとく湖に  
 投じて曰是を以て龍王を祭るといひ其画の妙なるも人あざ  
 知らざるに至りてち和壁も燕石にひととあざらん栗山先生の  
 話ありとて或人の云大雅死後門人ホ老師の麓中より多くの  
 遺墨を搜り出せし京攝或ハ隣國の人これを傳へて遠く  
 乞求するの各報る多金紙以て其金集りて七百兩にて  
 り時門人相謂て云此金紙のて老師の不朽を謀るべしと

栗山先生へ其多紙述へ碑文紙乞ふ先生云んはいと安き事  
 なり老畫師を一大不朽とせし我に一策ありこれ後人  
 といふさうばいふと向へは先生云老畫師の生涯を吾筆にて  
 残さんとは望と云なりさんども吾筆のて老畫師を汗さん  
 少里に七百金を以て一産の大石を求め佛像をもあはぬ  
 人の様なるもの割第一其習間又たいがごとく深く刻り  
 この外ハ行状生卒をも志るさびこれを大津栗田の道より  
 望む山のまゝ安置ば往來の旅人此處に到りてや大雅堂佛  
 堂と云ふ事あるやあるといふん又傳世に至りては益大雅堂佛の稱呼  
 傳るべしんハ老畫師も無何有の郷に於て一笑して此舉を

領い居りし時又門人ホホの不凡の盛事を解せしや  
 碑文を乞ふ先生云瑣々たる文字にて一片石に識を乞ふ費  
 を數十金と云ふは是れ其の残金を京師貧民に分ち賜ふ  
 べし又老画師の志も慙ひ碑文を載て美事なれば  
 いらしむこれ又門人不肯して遂は先生等と云ふ門  
 人等蕉中禅師と乞ひ碑文の成しと云固々懐ふ伊勢寂  
 照寺月仙和尚も一時畫名高く年ごとに千金の潤筆紙  
 坊ありと云傳ふされども遷化の後は其の画價も名も又後  
 了衰へりこれを譬するも一時權勢を得て氣韻の盛へたる  
 も一旦其衰ふるに至りては門人の崔羅を設るが如く實は名

ハ蓋棺の後して定るとやん宜哉

於菟按は思考云長嘯子の吳山の歌仙堂を双林寺門  
 前に移して大雅堂と建するに池大雅が歿後其門人ホ  
 けり惜むべきの事なきに翁彼哥仙を彫刻せし其の世  
 に傳へまほしきとある紙其志空しきのころ大雅も又生  
 前謙遜篤實の人ありしより己がなめよ一舊跡改る  
 るに移紙改るをころよとせんや門人の私にむべ  
 と云ふ宜哉

曾我蕭白の軼事

蕭白の京師の人画派絶一性又剛直して屈せざり日本願



寺主使僧より画紙乞はれしとありかの使僧ハ大教主の命  
 ありと自らまんど蕭白の戸紙叩き吾ハ門主の使僧之  
 蕭白ありやと云蕭白これ聞き内中申大老以てあけ罵  
 りて云汝何物の袖子ぞ猥不遜なるぞと蕭白とづり  
 呼ばり蕭白はこゝを扱ぬとて使僧をおりせしとまん  
 又九州に遊し時備前彦蕭白の能画あると云きある金地  
 の屏風の画を乞はる蕭白命に應じ濃墨淋漓一氣に  
 画り了彦特にめであひの潤筆銀子七枚を賜り了時蕭白  
 云数枚の紙子吾大老を孝にあはらむと云ふ彦これ  
 聞あひいんが彼は為儀りて報ひしとて更銀五十

枚を賜ふと云又常は大雅堂と交り厚くある時大雅蕎麦  
 粉を得蕭白は約して云近きふ来らば製し奉らんと蕭白  
 りこれ紙好む日ならむと東山を訪ひ相對して雅談時  
 紙移はしるると若者妻のこゝ互に口をたれしるごとく日既  
 晡なる時至りけり大雅云吾腹枵然り君もささるらん  
 とて妻玉瀾の命にて茗粥を出し相與しこれを嚙し又いふ  
 めく風月を吟下し夜もいづくわけぬが大雅云君の胸路の  
 闇夜に挑灯なるはかのおまじこれと吾家には具なりと  
 園院に蠟燭点して送る蕭白直に是を掲げ蹒跚とて  
 帰れり又或時蕭白我より對し画を望み我をよふ

繪圖紙水人とあつて園山まき水よりうづべと居りしと云ふ  
或人の話なり

謝蕪村の軼事

蕪村ハ丹後與謝の人なり謝を氏と名取長康と云ふ事師  
住を俳諧紙緒一名一時は高し又画紙緒一法を元明諸  
大家よりとり尤山水は長し又狂画多し於免按は世に傳  
りしは八九ハ賣作多し曾てきく日光鉢石齋藤氏の家  
蕪村の狂画より源平盛衰記巻軸あり是ハ天明年中行脚  
の頃此家より暫く逗留せしと記傳居主人盛衰記を讀其旁  
は横脚ししは其後書をきく筆は信て寫し終は數十紙

と及び蕪村歿後其妻黠婦ありありて此事を知り遠く  
日光より下り富永氏に就てその巻軸を贖し得て京師に  
傳り多金紙緒なりときく故は巻軸今ハ其家より傳り  
びとあしん惜むべき事ありけり也

松林山人の軼事

松林山人名儀俗稱松林羽矢二松林を修して林氏とせり淺州  
傳法院門前は齋居しは薜蘿簷は垂れ疎竹窓は常り常  
多く人と交らば閑適自ら甘し画名一時は高し志はれども  
猥に作らば是時あしと稱し自ハ高かりしを其ハ賤しき故  
或ハ排優を弟子となしこれハ己が名を嫁し一時拙技紙

賣るりのあり山人の志うび嘗て酒を嗜む時吉原町に遊び  
酒の為ニ数日かこしあり娼妓を酔をうむひ画を乞ふも  
一紙半角も作らざり常ニ世話なかり茶屋某ニ墨梅一幅  
を作しこれを乞ふ是ハ平生ニ報ゆと云々やん真の画史と  
云べり嘗て病ニ卧し自ら起ざり紙知り其友ニ托して云  
我死ハ墳上へ一片石ニ南無の六字号紙表して是れ凡  
人の末景に至りあるなむあると一笑していそれとな  
ん山人歿し近江の彩瀾源先生の撰文ニ其墓碣記あり山人  
常ニ先生と厚く交し故此文能く山人に考せり故ニ全文紙  
左ニ載し因ニ云彩瀾先生ハ俗稱佐々木源三郎と云生る前ハ

帶刀ともいふなり隠操ある人ニ晩年東叡山の北芋坂  
と云所ニ幽居し再び市中ニ出ば著述ハ詩経書経の自註  
もあり又詩文遺稿もありと承る

松林山人墓碣記

源世元 号彩瀾

山人姓林名儼字稚瞻松林其号肥前長崎人以其  
善画稱尤巧著色花卉翎毛冠于一時山人為人  
風神俊逸嗜酒不拘曠達之士也七歳時熊斐見  
其画奇之曰此兒當不減沈衡齋始遊京攝間味  
有知者安永末來東都時叡王盛延文學書画  
之士乃召見便殿大稱旨因与諸賓客交文酒

之會恒必與焉於其是其名靄然而興諸公卿貴人  
 競求筆跡使者踵門綃素充室然當其有錢則雖  
 權勢之需不肯執筆率在妓館酒樓間轉飲流  
 連動輒經旬不知在處至門人倩人物色搜求若  
 或囊中索然則杜門謝客攷揮寫雖屏障大幅  
 不日告成以故請畫者或謀門人時之云既得濡  
 潤乃復如初其曠達不拘大抵如此矣山人又終  
 身未嘗為娼妓掃片楮有敢請者則曰林山人不  
 能為汝輩畫博士是時風俗頹壞士人無恥輕俊  
 之徒或有囑娼妓唱名者山人蓋激此也寬政初

罹病死死自茲遂不復飲酒日默坐一室焚香念  
 佛非後曩時山人也知友皆憂之居三年賣廬治  
 裝將西往洛陽采隱而未果舊病再發遂歿于故  
 人之家山人不娶亦無兄弟或曰山人唐山賈人  
 之子也

平春海の軼事

平春海大人ハ和漢の字に通ト靈懐ヲ邊幅なく向リ  
 國學者流ありといゆるやまといふ魂といふこと張ト大人  
 いのしき重なるる答云これハ古言と歌よむことは真淵ト云ひ  
 たり苟も道と云ふところハ孔子の道を道といふれり



寄題某樓

同前 此作原以無名氏傳

幾歲垂帷稱太師著書不厭災棗梨究經未試編  
蒲苦摘藻寧知織錦遲偽說生前斲可駭盛名身  
後恐難期寄言臆慕諸兒輩謾喜新奇莫曠時

橘千蔭の軼事

橘千蔭大人八年十二三の頃少歌よむと父の枝直に授  
りそれ少重一日も私よまざる事如く長じて古学を好み真  
淵に後ひ深くこの道に至り萬葉集略解三十卷を著し  
又書法ハ松花堂を慕ひ其妙を伝はり又入木堂額傳授  
の諸法をも学び又画ハ建部後足は学びて其裁墨まの

傳りたり岡野守黒と云人大人の孝めり小倉の百人一首を捧  
よ上せせお傳へんと大人の親友に便りて乞ひんばいとやま  
とせり小倉の百首よ重新百人一首よるべとて日あぶさ  
ハ木堂傳授の書法り揮寫し贈らる時其秘傳を櫻  
ふさや人の難と云んば大人云んば秘する事はまことひかりと  
いはれ其人とより推しえり守黒翁ハ都下の富商よ  
てあせせり鷹皮紙の行れざり紙豆州熱海の今井半套と  
いふものと謀り良紙を抄出せり栗山先生跡をめぐりその  
紙を金花箋と名づけりこれより因て紙店紙金花堂と号し  
扁額も栗山先生の書なり守黒翁ハ篤実の人とて又俳諧を

しかば一書ハ松花堂を好めりお人の書を望みし故也  
 さるお人の七十餘ありて世にさるありその正月元日は菩提  
 所兩國の田向院に佛齋して和尚と逢ひ懐中より片紙を自  
 筆の橘千陰之墓と題せし紙ありて云これぞ歿後  
 ハ墳上はこれにて表し給れり死後ハさるあり子孫を重  
 戒名とやん福をうやさん無何有の郷に去りてハ免れ  
 角まれやらんおれが呼吸の通ふちなきはなるはさる  
 ひふれはさるありとて一筆して歸りしは幾程なくお家  
 よりお人の訃音和尚へ告ありければお驚きて死あはれ自  
 筆の墓表を和尚懐きしてお家よりあり志すべし

かたりしとあるお人のお人の和歌の感徳のまじり此一事真  
 達者とも云ふお人の友今も存する人お志すしりくま  
 りあるは其後林祭酒公の遺摺文より豊碑建立せんとも  
 きり

應舉の軼事

或時應舉は小猪の園を乞ふ者あり世に奉まぶ目のあり  
 野独の師より孤身へするは幸ひ矢背より老嫗を新紙負ひ  
 我々家に来る此事紙向あり山中よりたたく見るとありと  
 答ふ園を托して云汝うさねてこれを見れば早く来りてこれ  
 告より厚く賞を乞ふと云やりたるは月餘ありて老嫗

家のくさるる竹林中の野猪来り臥し老婆是を身する  
 あり速く京へ来りかると告げれば奉が云ぬまづ帰ると必だ  
 驚かすべしとて遠く門人西三輩以後ひ矢背より臥し野猪は  
 ぬ紙竹中の所居より奉直筆をとりてこれ紙より老婆  
 の厚く物なるとして世に夜吾家と誦する其後これを寫真  
 てほみ鞍馬より来る老翁は野猪の正臥向ふ山中常は是  
 を見ると云曰て画く所の図紙もて示しければ老翁之を思  
 て画はよとていづども野猪はあはれ必病猪ありと云奉お  
 とろきいて其故を問ふ野猪は安睡の中といづども其態夜お  
 のづらういさほひあり僕山中より病猪を身するは実この

画のこゝろとつけれが奉もめて曉りて老翁は野猪の形容紙  
 具の問ふ翁これを説くと甚詳なりこれ固て奉さきの  
 画而をよて公翁の口傳より改め寫した後又矢背の老婆を  
 さきよ見る所の野猪紙問ふ老婆云惟むべし彼野猪翌朝  
 竹中へ死ありと告く奉是紙聞きよく老翁が云を感  
 めるび老翁の来る時後日圖をみる所の幅を市にれば是を  
 真の野猪ありとて驚嘆せしとなり

於菟按は近世京師の画家多くは應舉の風を出でざるは  
 なる一実も應舉の近世の名手なり長澤芦雪も此門より  
 出で尤名紙はより吳月溪は始め蕪村翁は學びて其風



以於又應舉をも學び各々傳派傳て後又自己の工夫  
を以て画く豊彦景文南岳の諸家ハ皆吳家の法より  
出たり

建巢兆の軼事

巢兆ハ建部氏名共親号秋香菴又号菜翁在戸の人  
父ハ山本龍齋と云書家なり故有て千任の藤澤氏又寓  
居し後閑屋又遜居し俳諧を以て家派なせり又画を好  
み自ら作る而人物花卉翎毛山水とも又画家者流といへり  
皆驚異ハ又俳諧自画賛ハ紙上ニ溢る其細密なる  
りのハまれあり又好て舞樂の圖を作る其宗と云ふ

ハ土佐より出て洒落ある者ハ鬼念佛の圖あり嘗て市谷栢  
香屋某ある者結構ハ屏風紙仕立巢兆又画を乞ひしハ  
安き事なりとて来る日を定めしその日遂に來りしその  
後駕籠より迎へ春日酒肴を供てありしは酒間  
僅に画きて辭し去る又來るごとく管待りとの如くかく  
ること凡五年ありて真の山水又画きて圖ハ春日山なり此  
屏風今杉屋家ニ珍藏しと云巢兆俳名高くして画を  
好む者少し是俳諧又掩りれあること東師の夜半翁  
といひし文化十三年に歿せり

筆匠篆癡の軼事

享和のよきめ筆匠善藏ハ江戸の人なり母事一孝あり  
 常ニ造筆百數枝ニ及バこれハ識る所の文人詞客の間  
 ニ賣り錢を得帰途ニあるび母嗜む所の食物を求め  
 物りてこれをすすむ嘗て篆書ハ能く李陽氷三墳碑  
 を倣ひいそめる瘦細圓勁の妙ありこれ亦六書の學ニ  
 涉り説文を研究し其始め解字標目を一夕ニ了し其  
 一尋で全書を通読し疑ふところあれば説文繫傳同長  
 箋六書故同精訛六書通ホの諸書ニ折衷し又旁金石韻府  
 鐘鼎款識汗簡諸書ニ就て古文奇字をも心し此學大ニ  
 進りしより分貝やしく書ありれば多方ニ書をかり或抽抄

たるものあり或ハ全抄たるものあり其苦學くのごとく  
 一日製筆紙推の知己ニ至りてこれを賣る時ニ主人便面  
 をいづし杜詩秋興八首の篆書紙を以時筆をとる忽ち  
 字の向中同字あるもの生體一字も雷同せらるなりり  
 となり惜哉三十餘日狂疾を蒙りて歿す其後此醫  
 隱老辻先生といふ人文紙撰りて其墓ニ表し題し  
 篆癖先生之墓と云或人云此際六書を講ぎること久し  
 志し又偶ハ異質の人ありて駭くこと此學ニ向ひ未だ  
 其成就せざること忽其壽を奪はる實ニ惜むべきことあり  
 也や

近世名家書畫談下卷畢

名家  
真蹟

款字式

雲煙子摹集

伊藤東厓先生

名海

物徂徠先生

物我

朱舜水先生

朱之櫛

貝原益軒先生

貝原

服南郭先生

服元

梁田蛭巖先生

蛭巖

祇南海先生

阮隆字平安藤直寫

淺井圖南先生

宮崎筠圃先生 成嶋道筑先生 寫身 其書室

趙陶齋

補石

韓大年翁

韓天壽

井金我先生

井金

尾藤二洲先生

阿

古賀精里先生

精里

洪栗山先生

栗山

賴霞厓先生

賴堯

中井竹山先生

積善尊

龜井道哉先生

賴杏坪先生

杏坪

菅茶山先生

心之

皆川棋園先生

皆川

村瀨先生

村瀨

十時梅厓先生

梅厓

心越禪師

東華一以起如用寫

深草妙子

百拙元養和尚

久政海雲百拙山人鐵馬

六如上人

六如杖屨

大典禪師

集

賣茶翁

釋無幻

道中無用

大雅堂

夕年

謝長庚

廿五村

吳月溪

春

圓山主水

應舉

大雅之妻

玉函

木村蕪葭堂

吳齋

長澤與

世

高芙蓉

高孟彪

建業兆

吳

三熊花顛

高思孝

釧雲泉

釧

素山玉洲

素

賀茂縣主

鈴屋本居

楯取與彦

志剛

定長

血光

伴高漢

僧澄月

僧大愚

小澤蘆菴

後澄月並延

甚尾

契仲上人

野口

北村

西山宗因

契沖

主園

秀

宗周

芭蕉翁

榎本

服部

向井去來

桃香 其角 凡香 立生

僧千那

大津乙州

小西米山

萩原宗固

多卯乙州 米山 宗固

伊勢乙由

井上士朗

雪中菴

丁乃 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙 乙

園女

智月尼

加賀素園

恩 ち 月 我 凡 乙 代

三國遊女長谷川

秋色

二代目芳野

三の川 吹 乙 芳野

名

五

沈南蘋

南蘋沈銓寫伊字九類

伊字九

方西園

西園方濟吳興費漢源

費漢源

隨安

李用雪鄭培筆

鄭培

胡兆新

胡兆新

右款字式ハ真跡  
ナリ摹シク僅ニ  
名家數十人を  
挙ぐ余別々  
近世名家落款  
譜を多クめり是  
より辨形近き  
あり於菟識

近世名家書畫談跋

余賣典籍旁賣書畫夫舶來典籍所謂  
二酉五車照時定價故雖新種奇本而  
賜顧尊容懷金問價聽其所買獨書  
與畫互有真假真假鑒別非吾輩管見  
所窺此固待博雅君子之印証雖然既  
賣書畫安可魚目混珠欺己欺人哉然  
則真假鑒別竊不得不任而後庶乎  
不悞賜顧尊容於是雖殘絹片楮亦



復把玩猶心于識者或徵於紀載往々  
如有所得也而苟關係于書畫有補於  
賞鑒一言半語隨得隨抄遂得若干卷  
固雖未免矮人觀場之譏敢不自計乃  
於卷中採事近世編成二卷題曰近世  
名家書畫談前卷錄書畫瑣言後卷錄  
名流軼事併刻之于我玉巖堂以廣其  
傳要皆淺近麤言非敢供于博雅君子  
之巨覽姑示同臭且乞祭政嘗聞世之

輕薄子動評今之專門書畫目為隔年  
挑符或為然耶余之於此舉亦不得自  
不蹈鈴痴符之誚吁談何容易哉  
天保紀元十二月穀旦

雲烟子 安西於菟識



霞亭長 渡部 璋書



雲煙子編次

近世名家書畫談

二冊

發出

同

後編

二冊

嗣出

明清名家書畫談

二冊

嗣出

天保二辛卯年正月

江戸

横山町三町目

和泉屋金右衛門梓

容膝全藏